

No.95

平成26年1月30日

公益社団法人日本山岳会富山支部

年頭のご挨拶

支部長 山田信明

新しい年を迎えました。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

富山支部は昨年創立65周年を迎え、多くの記念行事を計画し支部会員多数の参加で無事当初の目的を達することができました。その内容は前号(記念事業特集号)で紹介したとおりですが、あらためてご協力いただいた各位に心から感謝申し上げます。

昨年は支部の重鎮が相次いで亡くなられ、支部活動の発展に貢献された先人の功績を再認識する年でもありました。9月以降3名の新入会員を迎えましたが、支部会員の高齢化が進行しています。一層会員増強に努力するとともに、支部山行や例会への出席者を増やし支部活性化を図っていきたくと思います。なお来年度の五支部懇親山行は富山支部が担当です。多くの参加をお待ちしています。

師走の年次晩餐会では、飯田肇会員と福井幸太郎さんが秩父宮記念山岳賞を受賞されました。飯田さんは二度目の受賞であり富山支部としても喜びにたえません。

来年3月の北陸新幹線開業により交流人口や登山者の増加が予想されています。現在進行中の「日本三百名山登山ガイド」と「富山の百山ガイドブック」の刊行が待たれるところです。6月には木村大作監督の映画「春を背負って」(立山でロケ)も封切られます。支部会員一人一人が地元の山の魅力を再確認して、安全登山と情報発信を実践する年になれば幸いです。

最後になりましたが、支部会員各位のご健康とご活躍をご祈念申し上げて年頭のご挨拶といたします。

ヒマラヤ・クーンブ・トレッキング

(富山支部創立65周年記念事業)

【期間】 2013年11月24日(日)~12月05日(木)

【参加者】 CL ; 辻 斉、SL ; 金尾誠一、川田邦夫、(ゲスト)金尾志津子、山崎美和子

【全体行程】

11月24日(日) 関西空港からバンコク空港へ。バンコク市内泊。Wall Street Inn Bangkok

11月25日(月) バンコク→13:00 カトマンズ空港着。

15時頃、迎えの車でカトマンズ市内の宿泊先「山水ルーム」に着く。

小生は 40 年程前にカトマンズを訪れたことがある。当時に比べると、当然市内は大きく広がっているが、車やバイクが激しく混み合っていて、誇りっぽく、少しがっかりした。

18 時頃、迎いの車で宮城近くの日本料理レストラン「古都」へ行って夕食。これからのトレッキング打ち合わせ。トレッキングの無事を願って乾杯。

11 月 26 日(火)

4:50 宿泊先の「山水ルーム」を迎えの車で出発し、カトマンズ空港国内便発着場へ。

5:10 到着するも未だ辺りは暗い。空港に霧が広がらないことを祈って出発を待つ。

6:30 周りが明るくなった頃、準備のできた Tera 航空の機(15 人乗り程)に乗り込む。

7:00 ルクラ到着。山の尾根を超えてそろそろ到着かなと思っていたら突然の着陸で、短い滑走路がかなりの傾斜で登り坂になっているのに驚いた。個人持ちのザック以外の荷物を受け取り、少し歩いて道路脇にあるロッジに入って朝食。ここルクラがヒマラヤトレッキングの出発点となる。

9:00 このロッジ兼レストランでボッカ 1 人に 2 つに分けてある荷物を預け、出発。

幅 2m 程のトレッキングルートを少し登ると左に流れもみえない程深い川筋に沿って長い登り坂が続く。所々が石畳になっている道路には牛糞や馬の糞が沢山落ちている。次第に様子が分かってきたが、かなり頻繁に荷を運ぶゾッケ(牛)や馬の列、そして大きな荷を持ったボッカが行き来する。落ちたばかりの柔らかい糞を踏まないように気をつけて歩く。この辺りを熟知した辻リーダーの懇切な説明に安心して進むことができた。も頻繁に往来するツアー客と挨拶を交わすことも多い。シーズン中はこのヒマラヤ街道が海外からの客で行列を作るほど非常に混むそうだ。天気は上々で、空気は乾燥している。昔、北海道で感じた「馬糞風」を思い出す砂埃もひどく、準備品で勧められたマスクを時々着ける。田舎の臭いにも慣れて 2 時間程下った頃、川に架けられた金属板を並べた吊り橋を渡る。それからは上り坂が延々と続く。ゆっくり一歩一歩足を進める。汗が出始める頃、防寒用の衣類を脱ぎ、水分を補給したりする。

10:50~11:00 タド・コシにて休憩。見晴らしの良い場所。

12:20 パグディンにて昼食。もし飛行機が遅くなった場合に宿泊を予定していた所であるが、順調な行程だったので、さらに先のモンジョまで行くことになった。



新しく作られた吊り橋は対岸の急登を楽にした

13:30 パグディンを出発。

16:05 モンジョ到着。 SAMIT HOME LOGDE

どのホテル(ロッジ)もほぼ似たようなスタイルである。玄関を入った所がロビーと食堂を兼ねたような部屋で、まわりの壁や窓側に長椅子があって、その前に狭い幅のテーブルが並んでいる。中央にストーブがあるのが一般のようだ。

18:00 夕食。 20 時頃就寝。

11 月 27 日(水)

6:30 モーニングティ。 7:00 朝食。

7:50 モンジョ出発。少し登った後、急な下りがある。一度河原まで下るが、そこから先の上流に高低差のある二つの吊り橋が見える。そこから先の斜面が急な登りで、此を緩和するために高い所に新しい橋が架けられたとのこと。その分高い所まで登らなければいけないが、後が随分楽になったようだ。特に牛や馬の行動が良くなったのだろう。

11:30 ナムチェバザール入り口到着。ガイドが入山手続きの間、10分程休憩。峠からナムチェバザールの集落が斜面に沿って広がっているのが見渡せる。道路は相変わらずの登山道で、部落の中は石畳と階段。これに交差して沢山の道が入っている。そこにはホテルやロッジ、商店が並んでいる。集落を見上げる高地には飛行場がある。



ナムチェバザールに到着して入口から集落を見わたす

12:10 宿泊の Friendship Hotel に到着。ラーメンとポテトの昼食。部屋に荷物を置いて少し休憩後必要な物だけ持ってホテルを出る。

13:30～15:30 ナムチェバザールの散策。部落の西側には氷雪を抱く美しい山が聳えている。

16:10 夕方、カメラを持ってナムチェの丘からのエベレスト・他の夕焼け展望に出かける。次第に雲が厚くなってきて丘に着いた頃には全く山を見ることができなくなった。夕焼け景色を見ようと来ていた他の客数人も諦めて下山した。すぐ側にあった薄暗い博物館の中を簡単に見て回り、我々も下山してホテルに戻る。

18:00 ホテルに戻って夕食。ニンニクスープ、カレー汁とライスは旨かった。

19時頃部屋へ戻って荷物を整理。 20時 就寝。

11月28日(木)

ホテルを出てやや急な上り坂をゆっくり登る。

これまで幾度も前後して歩く欧米のハイカーとも顔なじみになって、挨拶を交わす。

9時半頃 ナムチェバザールの空港の横を通る。ちっぽけな滑走路を持つ空港だ。

10時半頃、高台に立つホテル・エベレストビューホテルの展望台へ入り、コーヒーを飲んでエベレストの展望を満喫する。天気も良く青空の中にエベレスト頂上にできた傘雲の流れたものだけが見える。タムシェルク、アマダブラム等の山々が美しい。アマダブラムの奥にはピーク38が白く見える。

下方の谷から登った所にある村はポルチェで、エベレストへ向かう人達が最も多く行くそう。この丘の前に切り立つクンブラの山は宗教上登ることの



エベレストビューホテル展望台から見る景観



丘を下って世界遺産クムジュン村を眺める

できない山とのこと。その左下方の集落がクムジュンの村で、さらに左方少し高い所にある村がクンデで、これらの地域が世界遺産になっている。白い壁と緑の屋根で統一された建物が美しく見えた。丘の坂道を下ってクムジュン村へ行く。

12:50 クムジュン村の小学校の前を通過して村の中心地近くのレストランで昼食。日差しが強く、気持ち良かった。

14:30 クムジュンを離れ、下ってきた丘とクンプラの山を左手に見ながら回り込むようにして、ゆっくり下りに入る。

15:30 キャンジュマに到着。Amadabram Lodge に入る。道路を挟んで両方に客室や食堂等の建物があった。このホテルでは何か法事をやっているようで、賑やかな音と経のような声が聞こえた。庭に国鳥である黒クジャクを見る。



キャンジュマ辺りから見るエベレスト等の山々

16:30 夕刻、10分程先へ登った眺めの良い所で、エベレストが夕日に染まる写真を撮影。エベレスト、ローツェ、ピーク 38、アマダブラム等の山々美しく染まって見えた。

18:00 ホテルに戻って食堂で夕食。ハンバーグステーキ、ポテト、青菜など美味しく食べる。

18:45 頃、法事に呼ばれた僧侶と客が入ってきたので、部屋へ戻って 20 時頃、就寝。

11月29日(金)

7:40 ロッジを出発。エベレストを振り返りながら下る。

9:20 昨夜泊まったナムチェバザールに到着。一巡りしたことになる。ここからは往路と同じ道をたどって戻ることになる。下りになるので割と楽である。

12:00 往路で宿泊したモンジョの Sumit Home Lodge 到着。昼食。12:55 モンジョ出発。

13:45 Benkar 通過。りんごの産地だそうである。

14:55 Kalapatat 着。休憩（往路で昼食をとったお店）。

16:10 タドコシのロッジ着。 Kusumu Khangkaru Lodge 泊まり。

18:00 夕食。 19:20 部屋へ戻って休む。

11月30日(土)

7:30 モーニングティ。 6 時頃には窓下を通るゾッキョの鈴の音で目覚める。このタドコシのロッジからは近くにあつて、白く雪を抱く山(Kusumu Khangkaru)が大きく見える。

8:00 朝食（～8:20） 宿のご主人は朝早くからお香を焚いてお経をあげながら、建物内を歩き回っている。ガイドをやっていた頃、クレバスに落ちて助かったことに感謝しているとのことだった。信仰の深さを実感した。おマニパ・メム・・・

9:30 宿を出て、水力発電用の水路を見ながらアップダウンを繰り返しながら次第に河原まで下り、橋の近くで牛や馬の隊列の通過を避けたりしながら、峠まで登り、一息つく。

10:30 目の先にルクラ飛行場のある高台が見える。空港が目前に迫った所で一休み。普通なら聞こえるとのことだったが、この日は飛行機の音が無い。ここの天気は良いが、カトマンズが霧のためだろうとのこと。

12:00 ルクラ空港に到着。 Tashi Delek Lodge に入る。

往路で朝食を食べた所である。到着してもらったレモンティは美味しかった。昼食はシェルパの食事というシャクバを食べる。トッパというのはうどんのこと。午後は部屋でくつろぎ、食堂へ集まってからクンプ方面のトレッキングの打ちあげで、成功を祝してトゥンバというアワで作った焼酎で祝杯をあげる。大きなグラスにアワがいっぱい入ったものに熱いお湯を注いでストローで吸って飲む。幾度もお湯を足し加えて薄くなるまで飲む。美味しかった。

12月1日(日)

7:00 モーニングティ。飛行機の爆音が聞こえてくる。

7時半 朝食。朝食後支度をして空港へ向かう。滑走路が今度は下り坂になっていて短く、狭い回転半径で次々と小さい飛行機が入ってくるのは珍しく感じる。

10:10 ルクラ出発。

11:00 カトマンズ空港の国内線発着場到着。迎えの車で最初大きな荷物を預けている「山水ルーム」に入ってしばし休憩。

13:00 タクシーを拾って市街地へ出かけ、日本料理レストラン「故里」にて昼食。食後、市街地の商店街、土産物店などを見て回る。

17:30 到着した日に入った「古都」で夕食。ワインと鍋焼きそばで会食。

19時半頃迎えの車で宿舎へ。 20時過ぎ就寝。

12月2日(月)

今日からはポカラ方面へのツアーとなる。4時半頃に起き、買ってあった簡単な朝食をとって迎えの車を待つも、少し遅れる。

6:20 山水ルームを出発。もう明るくなっていた。車はトヨタのハイエース。

騒がしいカトマンズ市街を離れ、峠を越えるとマナスル、ガネッシュヒマラヤ山群、ランタン等の山々が遠望できた。

ポカラへはカトマンズ盆地の峠からの川とランタン山群からの川が合流して、インド側へ流れる。道路は国の主要道路にも関わらず、車の多い割には悪路で、ネパールのインフラの遅れが目立つ。大型車のトラブルも多いようだ。一部舗装はあるものの、酷いがたがた道路である。片道200km程だが、事故にならないよう、祈るほどだ。

8:10~8:35 コーヒータイムで、しばし休憩。 給油。

途中、強力な傭兵として有名なゴルカ兵のいる地域を通る。ネパールにおけるマオイストの存在の恐ろしい話も聞く。

11:10~11:20 アンナプルナ連峰が見えるようになった。右手奥には目立つ登ることのできないマチャプチャレが、そしてダウラギリの主峰など、素晴らしく美しい山々が間近に見える。ポカラの大地は素晴らしい！

12:30 Hotel Asia に到着。カトマンズとは全く異なり、道路に沿った商店街、あちこちのホテルの存在がきれいだ。ホテルからの景観は誠に美しい。ホテルを出て、旧市街地方面を散策し、湖畔近く



湖上から見る朝焼けのマチャプチャレ

にあるのどかな風景のレストランで昼食。

ホテルの部屋もきれいで、バスタブも付いていた。

12月3日(火)

5時に起床。舟をチャーターして6時頃より湖上からの朝日に輝く山々を眺め、写真を撮る。

7時過ぎにホテルで朝食。8時から部屋で荷物の整理。

8:30 ホテルアジアを出発し、東のカトマンズ方面へ向かう。途中、ミカンを売る沢山の屋台が出ている所でミカンを買って食べる。

12:10~45 往路で休んだドライブインで昼食。

13:55 カトマンズ盆地の峠通過。 14:30 山水ルーム到着。

14:50 買い物、散策に出る。 18時、市街地の「故里」で夕食。

20:00 山水ルームへ戻って、今回のツアーを終える

12月4日(水)

カトマンズ~バンコクを経て、大阪へ。

12月5日(木)

関西空港着。列車にて富山へ。

(川田邦夫 記)

20年越のリベンジ ? キリマンジャロ 5,895m

期 間 平成25年9月13日(金)~9月25日(水)

参加者 下伏康夫・下伏玲子・瀬戸紀美子(富山山想会)、石溪秀満(高体連)、本郷潤一

今回、富山山想会主催のキリマンジャロ登山計画に参加できる機会を得た。思えば今から20年前にも同山への登頂を目指したことがあったものの、マラングルートのキボハット(4,703 m)で高所順応できず、ガモウバックのお世話になり悔しい思いをしたことがあった。40代半ばで体力的に過信があったのか、今一步の所でリタイアせざるをえなかった。再チャレンジにあたり、5月に積雪期の白山での2泊3日のテント泊、7月に国立登山研修所で低酸素室での高所順応体験と、前回にはなかった備えをした。

13日、自宅に「ちょい宅」(乗合タクシー)の迎え、下伏夫妻、石溪さん、瀬戸さんと回り関西空港へ。空港内でドル両替等を行い、カタル航空にて23時45分機上の人となった。

14日、乗り継ぎのドーハ空港までは約10時間、日本との時差6時間。早朝空港内での朝食後、免税店を見てまわるも酒類は思ったほど安くない。ちなみに昔香港土産で今も大事にしているブランデー(レミーマルタン・ルイ13世)



シラキャンプ手前から見るキリマンジャロ

が日本円にして 26 万円と表示され、鍵付きのショーケース内に陳列されているのに驚きをおぼえる。再びカタル機でキリマンジャロ空港へ、タンザニアの地を踏む。空港には現地スタッフの大森さんの出迎え、そしてサファリドライバーのピーターの車（ランドクルーザー）でモシのホテルへ。石溪さんと同室、シャワールームを利用するも、なかなか温水にならず。他の部屋は大丈夫らしい。1 日目もようやく終わり足を伸ばして眠りにつく。

15 日(2 日目) ピーターの車でマチャメゲートへ。登山届と登山スタッフとの顔合わせ、チーフガイドのデウス、サブガイドのジェームスとネスト、他にコック、ポーターと合わせ 18 名で我々と総勢 23 名で登山開始となる。コック、ポーターは荷物を頭に載せて先行、その後ジェームスを先頭に異常なほどゆっくりしたペースで進む。昼食はすでにテーブル等が設置されて準備万端、至れり尽くせり。その後マチャメキャンプに到着、各テントが設営され一人一つのテントと贅沢な上に、埃・汗などを拭うお湯の配給（以後毎回行われた）。夕食は大テントで。ここでスタートよりよく顔を見る我がグループ外の登山者、ドイツ人のルドルフと合流。以後同行となる。日本とは違う満点の星空に感嘆、デジカメで撮ってはみたものの、さっぱり撮影できず。

16 日(3 日目) シラキャンプ(3,840m)、17 日ラバタワ(4,600m)、バラコキャンプ(3,950m)、18 日カラングキャンプ(3,963m)、19 日最終キャンプ地バラフキャンプ(4,600m)へと順調に高度障害もなく進む。今回の行程で初めて東の間だが小雨に遭うが大した影響はなかった。翌日の登頂に向け早めの夕食を終え仮眠に入る。

20 日(7 日目) 深夜 0 時、防寒具を身につけ万全の態勢で待望の ATTACK 開始。すでに何組かのグループがヘッドランプの明かりを頼りに出発している。なぜか最終 ATTACK はサブガイドのジェームスではなく、チーフガイドのデウスが先頭ペースメーカーとなる。これまでのゆっくりした歩きと違い、やけに速い。途中休憩ポイントまではなんとかか付いて行ったものの、これでは以前と同様の二の舞になりかねないと思い、ジェームスとマイペースの行動をとり、やっとの思



ンゴロンゴロのクレーター内アフリカゾウ

いで辿り着く。看板の傍らで他のグループが記念写真を撮り下山し始めている。ジェームスが握手を求めてきたものの、我々のメンバーと会えず、一足先に下りたのか。とりあえずシャッターを押してもらい、6 時 15 分下山。バラフキャンプに戻り、朝食といったところであるが、心臓が締め付けられるようで食欲なし。皆より一足先にジェームスとともにムエカキャンプ(3,100m)へ。

21 日、ムエカゲートにて登山証明書をもらいポーターと別れる。

22 日、アルーシャのホテルからマニヤラ湖公園へ。途中「(鈴木) 宗男ロード」と名付けられた舗装道路を走り、サファリドライブ（アフリカゾウ、サル、シマウマ、ヌー等）を堪能、ンゴロンゴロのロッジへ。インド系の経営らしく、部屋・食事とも申し分なく素晴らしいものである。

23 日、マサイ族の部落で踊りや部屋内を見学の後クレーター内のドライブ（ゾウ、シマウマ、キリン、カバ、



イルキティンガ村の子供達の授業風景

ペリカン、フラミンゴ等々)を十二分に楽しんだ。

24日、アルーシャのホテルでの朝食後メルー山麓のイルキティンガ村でカルチャーツアーの家庭料理で昼食を味わい、子供たちの授業風景(ローマ字—日本語—)に触れた。同日夕刻、キリマンジャロ空港を後にして、25日夕方関西空港に到着となった。

(本郷 潤一 記)

9月例会山行 岩手山 2038.1m(岩手県)

日程：平成25年9月28日(土)～9月30日(月) 晴

参加者：CL 本郷潤一、SL 金尾誠一、渋谷 茂、山岸和子、菅田静子、米谷真由美(菅田友人)

《28日》

滑川IC6時集合、澄んだ青空に剣岳、毛勝三山等眺めながら、岩手に向けて出発です。去年の例会山行の早池峰山、姫神山に続き今年は是非岩手山にとり、お天気に恵まれた3日間になりました。東北自動車道に入り、次第に近くに迫る岩手山を眺め、明日の楽しみが倍増です。14時過ぎ松尾八幡平ICより八幡平の県境登山口駐車場に着く。大小約40の火山からなる八幡平はあちらこちらに温泉場の湯煙が上がっています。紅葉は少し早いようですが、火山台地の雄大な自然の中のブナ、アオモリトドマツの樹海から岩手山を眺めながら、整備された遊歩道歩きは快適なものです。17時、滝沢村宿舎の畠山旅館に着きました。夕食に前沢牛のスキヤキ風もあり、大変美味しかったです。



八幡沼



3合目避難小屋

《29日》

全員目覚めも好く岩手山馬返し登山口まで旅館の車で送ってもらう。駐車場は広く、もう80台位とまっている。7時20分登山開始です。沢山の登山者が続いて来られ、地元の方に旧道と新道のどちらがよいか聞き、晴れた日の旧道へと進む。1合目で休憩中、一人の男性に「富山の方ですか？」と声をかけられる。何時も富山弁丸出しでの会話は富山生まれの方には嬉しかったのでしょう。

登り始めは肌寒く感じていましたが高度上げるに汗が吹き出ます。東北も熱いなあ・・・と4合目付近に来た時、花火の三尺玉打ち上げのような地響きが起こりびっくりしましたが、登り右斜面側は、陸上自衛隊の演習場でした。樹林帯ではウメバチソウ、オヤマノリンドウ、トリカブト、タマガワホトトギス、ハギ、ツリバナ等々。火山灰と岩場



岩手山頂上

の登山道に赤い実を付けたヘビノボラズが沢山あり、握りそうになって、トゲトゲのために、すぐ手を引っ込めます。6合目には今にも落ちて行きそうな大岩がある。10時45分、8合目の立派な避難小屋に着く。水場や簡易水洗式トイレもあり、小休止の場である。湧水の「御成清水」は冷たくて美味しかったです。不動平は頂上薬師岳への分岐地点です。晴れわたった岩手山は御



鉢巡りの登山者で賑わっていました。山頂には11時45分着。素晴らしい眺めに感謝、感激です。頂上に高岡からの3人連が焼走りコースを上下山し、明日は早池峰山へ行くとの事です。昼食後、御鉢の上に並ぶ観音様を巡り、不動平から右手の火口原のお花畑コースへ縦走です。

お花畑へと下降途中の岩山の紅葉は振り返り振り返り、感動ものでした。特に大地獄分岐前後は日本庭園でした。切通し14時30分、姥倉山分岐14時40分、松川温泉分岐15時10分と通過し、犬倉リフト駅より16時15分スキー場のリフトで第3、第2、第1リフトを乗り継ぎ、網張スキー場リフト駅に16時45分に着きました。リフト乗車中は汗で濡れた体が震えるほど寒くなりました。

宿泊はすぐ横の休暇村岩手網張温泉です。白濁の硫黄泉は体の芯まで温まり、夕食は季節の香り豊かなまつたけ等のご馳走で美味しく頂きました。

《30日》

朝食後、岩手山の南麓にそそり立つ鞍掛山897.1mに登る事にしました。登山口8時20分発です。2時間コースで地元の人達は岩手山を眺めに、又季節に応じて景色の変わる鞍掛山は沢山の登山愛好者がいるようです。鞍掛山頂からの岩手山も雄大です。登山口に10時15分着。昨日のストレッチになったようで爽快です。



途中、日本最大級の農場で明治24年創業の小岩井農場を見学し、11時50分盛岡ICから富山へと車を走らせる。滑川ICには19時30分に無事着きました。お疲れ様でした。

(山岸和子 記)

岩手山 (2038m)

【2013年9月29日 晴れ】

早池峰山に出かけた折、岩手山の秀麗な姿に取り付かれてしまった。裾野を広げた火山独特の姿は富士の名にふさわしい。ただ、岩手山は場所によって、なだらかな線が片方だけに見えるから片富士とも呼ばれている。最も端正な姿に見えるのは東側である。古くからは南部富士と呼ばれていた。石川啄木が「ふるさとの山に向かひて言ふことなし ふるさとの山は有難きかな」と詠んだ山、宮沢賢治も「岩手山」という詩を綴った。

前日は、思ったより早く着いたので、八幡平に登って岩手山の姿を目の当たりにし、明日への登頂意欲を高める。麓の滝沢村の畠山旅館に泊まり、朝、宿の車で馬返し登山口まで送ってもら

う。登山口の駐車場には、たくさんの車が停車している。人気の山であることをうかがわせる。登山者カードに記入して、ブナやミズナラの落葉広葉樹の林の中を登って行く。0.5 合目に着くと大きなブナの木がある。ここから一旦道は分かれ、二合五勺から旧道と新道に分岐する。展望のいい旧道を選ぶ。道端にウメバチソウが沢山咲いている。桶の回り締めたような地形をしている「桶(こが)の淵」という場所に出た。前方には、目指す岩手山の姿が望める。



岩手山山頂

演習の音が静けさを破る。岩の間には、枝に鋭い刺のあるヒロハヘビノボラスが生育し赤い実をつけている。小豆色の葉が紅葉してなかなかいい色具合である。広大に広がる雲海には早池峰山が浮かぶ。結構日差しが強く、風もなく暑い。火山で形成された斜面を、滝沢村の景色を俯瞰し、周囲の樹木の紅葉、黄葉も楽しみ、低木林の中を潜り抜けながら黙々と登って行く。7 合目の鉾立に到着すると、急な岩場の道から解放されて、前方にお椀をかぶせたような岩手山が、巨岩とともに獅子頭が祀られている祠越しに見える。緩やかな道を進めば、八合目避難小屋に到着である。多くの登山者が思い思いに憩い、トイレもあり、おいしい水が得られる。岩手山が雄大に裾を広げている。

八合目の避難小屋から不動平に出て、火山特有の火山礫で足場が定まらないガラ場を登って行く。分岐点まで登ると、赤茶けた山塊が火口の回りを形成している。お鉢の中央火口丘の妙高山が鎮座し、御室火口にある岩手山神社奥宮辺りからは噴煙が上がっている。前方に、岩手山の最高峰の薬師岳が見える。観音像にお参りしながら登って行けば、岩手山山頂に到着である。まさに雲上の人になったかのような俯瞰図が眼下に展開している。火の山であった時の岩手山の姿を彷彿とさせ、威圧されるような迫力である。山肌には、あちこちに枯れたオヤマソバが砂礫にしがみついている。周囲には、東北の山々が美しい姿で居並ぶ。

時間に余裕がないので、休憩もそこそこに山頂からお鉢を巡って不動平に下り、お花畑コースから網張温泉を目指す。広い湿原のお花畑までは、急な石の多い道である。固定ロープもつけられていて、ダケカンバやオオシラビソなどの落葉樹と針葉樹の森をひたすら下る。火口壁の鬼ヶ

一合目の広い場所に着いた。一合目までは、合目間が一番長いので0.5 合目という標識がある。木の階段を登って行くと、やがて見晴らしのきく岩場にでた。ウリハダカエデやヤマウルシなどの木々が朱く色づき始めている。二合目からは再び林の中に入る。木漏れ日を拾いながらツリバナやオオカメノキの色づきを堪能し、岩の多い道を登って行く。三合目を過ぎるころから、岩場の登り道である。時折、自衛隊の砲弾



中央火口丘から岩手山を望む



鬼ヶ城の岸壁

城の千変万化、変化にとんだ岩壁を見ながら下りきると、木道のつけられた平らな「お花畑」に着いた。岩手山の懐に抱かれた景観は、穏やかで心休まる別天地の雰囲気である。夏には、高山植物が咲き乱れるであろう。地元の方に尋ねると、網張温泉の登山ロープウェイまでは、最終便の午後5時に間に合いそうである。ここから鬼ヶ城からの分岐である「切通し」までの道は、大地獄谷と称されるように硫黄のある沢が流れている。周囲は、紅葉が真っ盛りで、真紅のナナカマドが一際目を引く。スノキやクロマメノキ、ヒメシャクナゲ、ガンコウラン、シラタマノキ、黄色のミネカエデが山肌を飾っていて、山中の楽園ともいふべき景観が展開し、岩手山の優しい表情に浸る。



切通しへの道から岩手山を望む

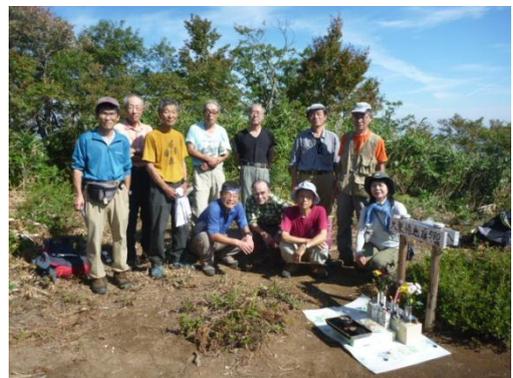
再び登坂となり、分岐点の「切通し」から黒岩山を目指す。途中で網張温泉から岩手山に登り、下山してきたという登山者が引き返してきた。黒岩山に登らずに黒岩山を巻いた方がいいとのこと、我々も引き返す。中腹の道はなだらかで歩きやすい。樹林帯を抜けると黒岩山への分岐点に出た。それほど時間に差はなかったようである。前方に地熱が煙を上げている。松川コースの姥倉山手前で、網張温泉側を下る。階段状の登山道が続く、オヤマリンドウが青紫の花をたくさん咲かせている。再びダケカンバなどの林の中を進むと大倉山への分岐点になる。地元の登山者に網張温泉へのルートを訪ねたが、途中でこの分岐点で迷うだろうと、わざわざ分岐手前で待っていただいたようで、今回は、地元東北の人の温かい人情に感じ入る旅でもあった。大倉山を巻いて網張へのリフト乗り場に着く。リフトは三本あって、宿泊場所である休暇村岩手網張温泉のすぐ横に降りた。長い道のりであったが、岩手山の懐の深さと豊かな表情を感じる山旅であった。翌日は、岩手山を望む標高897mの鞍掛山に登った。ミズナラやダケカンバの明るく、優しい林の魅力を存分に味わい、東北山の旅のフィナーレにふさわしい二時間余りのハイクであった。帰路、小岩井農場に立ち寄った。ここからも岩手山が眉目秀麗、美しい姿で見送ってくれた。

(渋谷 茂 記)

10月例会山行（谷村さん追悼登山）大乘悟山

参加者：木戸、石浦、近藤、山田、辻、村上、森、金尾、河村、山岸、本郷、渋谷、島津

10月6日、昨年死去された谷村元副支部長を偲んでの追悼登山が行われた。場所は楡原の大乘悟山で、谷村さん宅の裏山である。集合場所の天湖森の駐車場から延びる林道を歩き始め、1時間余りで山頂に到着した。この日は、雲一つない晴天で、山頂からは立山連峰の山々が絶好の展望日和であった。昨年、3月に谷村さんと登った時は、山の姿が見えなかったのが、随分と残念がっ



ておられたことを思い出した。山頂で形ばかりのお供えをして、快活だった谷村さんを想い、静かに手を合わせた。この後、笹津山のマイクロ鉄塔の場所で昼食。谷村さん譲りのシャレも飛び

出し、愉快な一時であった。帰りも同じ林道を辿り、道脇に咲くハンショウヅル、ハコベ、ガマズミ等々の花々を鑑賞する道中となった。皆が気になった崖に咲くサボテン風の花は、後日、山田支部長の調べで、ベンケイソウ科のツメレンゲの花と分かった。 (金尾誠一 記)

第 29 回全国支部懇談会「静岡大会」

○10月20日(日)

15時より、静岡駅前の「ホテルアソシア静岡」にて今年度の全国支部懇談会が開催された。25支部より約200名の参加(静岡支部60名)があったが、富山支部からは山田、金尾の二名が参加した。

来賓からは、6月に世界文化遺産に登録された富士山について、その普遍的な価値や登録に至るまでの経緯やご苦勞をお聞きした。記念講演では、富士山麓で融雪期に特徴的なスラッシュ(融雪)雪崩についての研究結果と昭和47年3月に発生した大量遭難事故に



Aコース参加者記念撮影(三辻)

ついての詳細な実態と原因究明について語られた。富士山についてこうした歴史があることを初めてお聞きし、貴い研究が長く続けられたことに敬服した。

その後の懇親会は、あたかも本部で行われている年次晩餐会のような雰囲気での進行であった。

○10月21日(月)

翌日の山行では、富士宮口新5合目から御殿場口駐車場までのAコースに参加した。所々で、前日詳しい説明を聞いたスラッシュ雪崩痕を見ながら宝永火口、御殿庭、四辻、下双子山を辿った。富士山といえば先ず山頂を目指すのが通常であるが、こうした山麓を辿って見ると、今まで考えてもみなかった富士山の地形、地質の一面を伺い知る機会となった。

富士山の噴火歴史の説明や特異な地形観察を交えるなど学術面を主としたコース設定で日本山岳会に相応しいものであった。全体として下りコースだったことも、高齢参加者に配慮された企画であった。静岡支部の方々の行き届いた配慮に感謝して山行を終えた。(金尾誠一 記)

第 52 回全日本登山体育大会茨城大会参加

奥久慈男体山 654m ほか

期 日 平成25年11月8日(金)～10日(日)

参加者：森 修作、永山義春、本郷潤一、山田信明、山岸和子、菅田静子ほか9名

昨年の福井大会につづき恒例の大会に富山県山岳連盟チームとして15名で参加。初日は水戸市内での開会式・講演会の後、各コース毎に宿泊場所へバス移動した。支部会員のうち森さんは北茨城市の花園・七



男体山は正面の岩山(大円地から) イノシシの被害多し

ッ滝コースへ、他の 5 人は大子町の奥久慈男体山・袋田の滝コースである。

大子温泉の宿舎を 6 時に出発してまず日本三名瀑のひとつである「袋田の滝」を見学。専用のトンネルをくぐると高さ 120m、4 段に落下する滝の直前に出られる。7℃と寒かった。そのあと、バスで登山口になる大円地へ移動、3 班体制で約 7km の縦走コースを歩いた。一等三角点のある男体山は 653.8m で、大円地から 470m の標高差があり、途中鎖場やロープが連続する急峻な山。集塊岩の断崖の山頂からは阿武隈山地や遠く太平洋まで見晴らせる。ただし天気はあまり良くはなかった。紅葉も始まっており珍しい花やキノコを見ながら、アップダウンを繰り返しつつ徐々に高度を下げるコース設定になっていた。途中牧場跡の草原で落葉樹の苗木を植樹する森づくりの団体を見た。

貸切バスでの参加のため、帰途は日光東照宮参拝のあといろは坂、中禅寺湖、金精峠経由で沼田 IC へと抜けたが、すでに紅葉は終わり冷たい雨の降る山越えであった。(山田信明 記)

五支部懇親山行(京都・滋賀支部担当)

「歴史と展望の山歩き」金勝アルプス

日時：平成 25 年 11 月 16 (土)・17 (日)

場所：(16 日) アーブ滋賀 (財団法人滋賀県青年会館) 滋賀県大津市唐橋 23-3

(17 日) 上桐生～落ヶ滝線～鶏冠山分岐～天狗岩～白石峰～狛坂磨崖仏～逆さ観音～オランダ堰堤～上桐生

参加者 富山支部・石浦、山田、川田、金尾、山岸、石川・8 名、福井・11 名、岐阜・6 名

京都・滋賀・14 名、合計 44 名

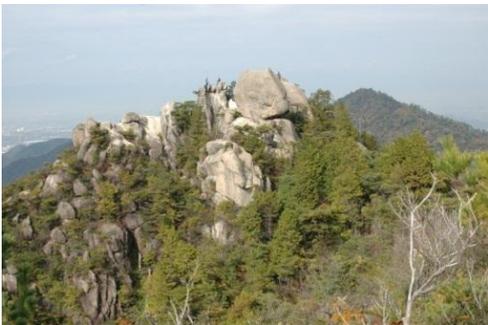
内容：

16 日、9 時に富山西インター駐車場に集合。途中、多賀大社を見学して大津入りする。山田さんは前日、伊勢で同窓会があり、直接会場に入る。16 時から、松下征文さん(副支部長、レスキュー比良代表)による講演、「比良山系の自然と遭難の現状」があった。比良山系の自然状況、遭難実態、レスキュー活動、遭難予防への取り組みなどが語られた。夜は、各支部持ち寄りの酒を飲みながら懇親会が行われた。

17 日、栗東市の金勝山(阿星山、竜王山、鶏冠山)ハイキングコースを歩いた。標高は 600m に満たないが、良く整備されており、また滝あり、岩あり、展望も良く飽きさせないコースであった。奈良・平安時代のものといわれる仏教遺跡もあり、歴史を辿るコース設定も魅力があった。京都・滋賀支部のお世話に感謝し、来年は富山での再会を約して別れた。



講演 (松下征文さん)



天狗岩

(金尾誠一 記)

湯口康雄さんを偲ぶ

突然の事であった。湯口康雄さんの訃報を新聞欄で見た時「しまった」と「弱った」の二つの言葉が脳裏を横切った。「しまった」とは、最近の「山岳」Vol 108号に寄稿された「武田久吉の書簡をめぐる(吉澤庄作との交流)」の文章が何度読み返しても難解なのである。しばらくご無沙汰しているのでこの事を話の種に訪ねてみようと思っていた矢先の事であった。湯口さん宅とは近くに居るのに早く訪ねるべきだったと悔やんだが今となっては後の祭りであった。

そして「弱った」は、「困った、これからどうする」の思いだった。湯口さんと言えば誰もが認める「郷土山岳史」、なかでも黒部川山塊に関する研究の第一人者である。特に古い文献に関する造詣が深かった。ひとつひとつ古書目録で文献を探し出し、取り寄せながらの研究であった。「古文書を読み解く時はチョットしたコツがあるがやっちゃ」と愉快そうに楽しそうに話しておられた事が思い出される。

山田支部長から湯口さんの追悼文を依頼された時少し困った。以前、富山支部記念誌で中島正文氏への追悼文を廣瀬誠氏が、そして廣瀬氏には湯口さんがそれぞれ山岳史研究者同士として功績を紹介し「うんちく」ある内容で書いておられる。山岳史研究、それは私が全く踏み込んだことの無い領域である。そこで、湯口さんが発刊された「黒部雑記」や「黒部奥山史談」などの著書を改めて読み返した。昭和30年代後期に当時余り記録の少なかった支流遡行を中心に、黒部川山塊に分け入り、また文献を調べたりして雑誌に投稿を繰り返されていたが、おしなべて当時の先輩諸兄は強烈な個性・信念を持って山に個々が向かい合っておられた。それ故に色々と軋轢もあったらしく、やがて湯口さんは山友達と距離を置かれたと耳にした。でも黒部への情熱は衰える事無く以前にも増して湯口さんを駆り立て研究を続けられた。

当時すでに黒部に関する事柄は出版なり数多く発表されてしまっていた。「黒部雑記」の「あとがき」欄の中で、「黒部はそのころ、すでに先人によって秘密性がほとんど取りのぞかれていた。おそく生まれてきたことを悔いてもしかたなかった」そして「かれらの残したものを捜すのにあくせくした」と言い、当時の自分の行っている様子を「落穂ひろい」と書き嘆いておられる。しかしまた、文章の冒頭で「わたしにとって黒部は地元である」ときっぱりと書き留めておられる。この「地元」とは何か。地理的の表現も然ることながら、そこに暮らしてきた者だからこそ感じられる黒部に対する熱き思いと愛着心、そして山々に感謝する畏敬など精神的意味も含んでいると思う。「地元」に暮らしていたから聞いてきた山の伝承や古人からの言い伝え、そして近代登山黎明期の黒部で活躍した人々の話。それを生涯かけて収集研究する姿は選択肢の余地の無い「必然性」があったのだろう。「落穂ひろい」などでは決してない。かくして、記述内容は「アルピニズム」から「フォークロア(民俗学・民間伝承)」と変化していく。それが湯口文献の真髄である。

「山岳史研究のパイオニア」中島正文氏、それに続いた廣瀬誠氏、そして今回の湯口康雄さん。綿々と引き継がれてきた富山支部の誇る郷土山岳史に関する博識者がまた一人旅立たれた。昨今の登山ブームのなか、群れる事も無く「地元」に腰をすえ、黙々と「自分の山」を続けられていた姿に、もはや「孤高」を感じる。「黒部奥山史談」で最後に「それにしても、めでたく一冊に

することにできたということは、遅筆の私にとっては人生の快事である」と結んでひっそりと自分自身をねぎらっておられる。急逝は悔やまれてならないが、湯口さんの魂は黒部をそよぐ風となり八千八谷を駆け巡り、いまだ探究の旅を続けておられるような気がする。

(藤條好夫 記)

追 悼

昨年 11 月 27 日、新聞のおくやみ欄に湯口康雄の名を見て、あまりにも唐突なことでびっくりした。

それというのも、10 日ほど前に電話で話していたばかりである。それは富山県山岳連盟が富山 100 山を選定しそのガイドブックを出版するに当たり、そのコースに関わりある人物の伝記を載せることになり、その執筆をお願いしたのであった。人物は塚本繁松であり、お願いするとあっさりひきうけてくれた。ただ、現在、家をリフォーム中で山の資料はすべて別の場所に移してあるので年明けになるだろうという返答であった。私たちの知らない塚本繁松について書いてくれるだろうと楽しみにしていたのである。

彼と知り合ったのはいつどこであったか、半世紀近くも前のことであり正確には思い出せない。彼は大学を修了して最初の任地が魚津市立片貝小学校であり、そこは毛勝三山から僧ヶ岳に連なる山城の水を集める片貝川の集落にある小学校で、山好きな彼にとっては好都合な勤務地であった。4 年間務める間に発電所水番のひとつたちとも親しい関係を築いたことが記録から読み取れる。

やがて朝日町、入善町の山好きを集めて昭和 39 年黒檜山岳会を創立する。会の命名は黒部川の名に由来し黒檜は彼の発案だったと聞く。若い仲間を得て足繁く山に通い、果敢に活動し、その記録を山岳雑誌「岳人」に多く投稿していた。加えて山案内人や、登山史に名を残す人物など足をかけて綿密に取材した文章も載せる。昭和 48 年にはそれらをまとめ「黒部雑記」として北日本出版社から 1000 部限定で上梓している。私も毛筆で丁寧に書きされたものをもらっている。

彼も年を重ね肉体的にも山登りの限界を感じた時、先の「黒部雑記」の後半部にある内容に磨きをかけ、さらに山名由来、歴史の山道、山案内人列伝など多くを加筆して「黒部奥山史談」を平成 4 年に桂書房から刊行した。それは並みの努力ではなしえない。そのあとがきに“黒部といつもなんらかの形で関係していないと落ち着けなかったのである。いふなれば憑かれていたからでもあろう。それも久遠の黒部に”と書かれている。

彼は容易に胸襟を開くタイプではない。それが 10 年ほど前から、年末に私が作っていた山のカレンダーを持って彼の家を訪ね、近況や山の放談をして半日も暇潰しすることが続いていた。今年には塚本繁松の原稿を取りに行くことになっていたはずが、急逝で鬼籍に入ってしまったので新しい原稿がない。かくなるうへは彼が北日本新聞社の「富山大百科事典」に書いていたものを転載するしかない。おゆるしのほどを。合掌。

日本山岳会入会は 1968 年 7 月 紹介者は田中栄蔵（ペンネーム諏訪多栄蔵…岳人編集部）と若林啓之助である。

2014.1.29 (佐伯 郁夫 記)

